

〈新刊紹介〉

(価格は税込定価)

遠藤織枝編著『ことばに潜むジェンダー——学校・本・テレビ・日常のなかのもやもや——』

従来の「女らしさ」「男らしさ」の規範意識や様々な分野での性差別意識を温存するものの一つに、ことばがある。本書ではこのような問題意識に立ち、言語研究の知見を活かしてことばの中に潜んでいるジェンダー不平等を掬い上げようとしたものである。学校や本、テレビや日常のことばといった身近な場面を取り上げ、ジェンダーの関わる表現を分析している。

本書は全4部12章からなる。「はじめに（遠藤織枝）」に続き、「Ⅰ. 学校のことばのジェンダー」には「第1章 小学校の教科書はけっこうジェンダーレスになってきています（三枝優子）」「第2章 男女の差を中学生たちはどう見てきたのでしょうか（加藤恵梨）」「第3章 大学生はどんな呼ばれ方をしているのでしょうか（大島デヴィッド義和）」を収める。「Ⅱ. 本の中のジェンダー」には「第4章 マンガの中の女性はどう話しているのでしょうか（因京子）」「第5章 絵本の中の女男はどう話しているのでしょうか（佐竹久仁子）」「第6章 国語辞書はジェンダー平等でしょうか（佐竹久仁子）」を収める。「Ⅲ. テレビの中のジェンダー」には「第7章 女性アナウンサーの声が高いのはなぜでしょうか（大原由美子）」「第8章 お笑い番組の性表現はどこまでOKでしょうか（佐々木恵理）」を収める。「Ⅳ. 日常のことばのジェンダー」には「第9章 四字熟語はジェンダー不平等なものばかりです（孫琦）」「第10章 セっかくの懐かしい歌も困った歌詞が目立ちます（遠藤織枝）」「第11章 家族の呼び方も変わってきています（遠藤織枝）」「第12章 日本語の「女ことば」は世界の中ではどう見えているのでしょうか（本田明子）」を収める。末尾に索引を付す。（川島拓馬）

（2025年9月30日発行 明石書店刊 四六判縦組み 304頁 定価2,640円 ISBN 978-4-7503-5991-5）

小林芳規著『小林芳規著作集 第八巻 角筆文献・小品』

本書は『小林芳規著作集』全8巻の最終刊である。本書には角筆文献に関する論考のほか、書評、紹介文、緒言・後記、推薦序文、追悼文が収められている。角筆文献に関しては、発見第一号の報告からその後十数年・二十数年後に新たに展開された論考を主として収めている。本書の構成は以下の通り。

「凡例」に続き、角筆文献に関するものとして、「訓点記載の一様式についての報告」「角筆文献研究の課題」「方言史料として観た角筆文献」「韓国遺存の角筆文献調査報告」「韓国における角筆文献の発見とその意義——日本古訓点との関係——」「象牙で書かれた古代の文字」「コラム 角筆經典」「見えない文字から古代言語文化史を読み直す」を収める。

書評・紹介として、「(書評) 訓読語研究史から見た「訓点語の研究」」「(書評) 訓読史料として観た『^{興福寺本}大慈恩寺三蔵法師伝古点の国語学的研究・訳文篇』」「(書評) 大坪併治著『訓点資料の研究』」「(紹介) 国語研究論集編集委員会編『^{東京大学国語研究室 創設百周年記念}国語研究論集』」「中田祝夫 古訓点・古辞書研究に大きな足跡」「(醍醐寺) 文化財調査としての展開「国語学」」「田中稔先生と奈良文化財研究所の調査」を収める。

緒言・後記として、「『^{平安鎌倉時代に於ける}漢籍訓読の国語史的研究』 緒言」「『角筆文献の国語学的研究』 緒言」「『角筆文献研究導論』 緒言・後記」「『^{平安時代の}漢文訓読史の研究』 緒言・後記」「『角筆のみちびく世界』 まえがき・あとがき」「『図説 日本の漢字』 あとがき」「『角筆のひらく文化史』 まえがき・あとがきにかえて」「『角筆のひらく文化史』 韓国版・序文」を収める。

推薦序文として、「沼本克明著『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』 序文」「沼本克明著『日本漢字音の歴史的研究——体系と表記をめぐる』 序文」「^{佐々木峻著 菅原範夫編}『広島大学蔵増刊節用集の研究』 序文」「東辻保和著『もの語彙こと語彙の国語史的研究』 序文」「山本真吾著『平安鎌倉時代に於ける表白・願文の文体の研究』 序文」「松本光隆著『平安鎌倉時代漢文訓読語史料論』 序文」「^{平安鎌倉時代に於ける}佐々木勇著『日本漢音の研究』 序文」「^{中国語との比較による}栞竹民著『日本語の漢語の意味史的研究』 序文」を収める。

追悼文として、「追悼 藤原与一博士」「追悼 築島裕博士」「築島裕博士を偲ぶ」「訓点語研究史における築島裕博士の功績と残された課題」を収める。

末尾に「小林芳規略年譜」「小林芳規研究業績目録(著作・論文等)」を付す。(以上、書名等の旧字体は新字体に改めた)(竹村明日香)

(2025 年 10 月 15 日発行 汲古書院刊 A5 判縦組み 512 頁 定価 16,500 円 ISBN 978-4-7629-3667-8)

森山由紀子・加藤大鶴編『女ことば』『男ことば』を越えて——日本語ジェンダー研究の新たな地平——』

本書は、2020 年度日本語学会秋季大会のシンポジウム「データから見る日本語と「性差」」をきっかけとして企画されたものである。「女ことば」「男ことば」を「性別」に所与のものと考えた本質主義的な立場は現代ではほぼなくなり、ジェンダー(社会的・文化的性差)の反映であると捉える見方が主流となった。本書では現代語・古代語の正確な把握を通して、日本語とジェンダーとの関わりを具体的に検証しようと企図している。

本書は全 4 部 16 章からなる。「第 1 部 「女ことば」「男ことば」とジェンダー」では本書の問題意識を明確化し、「第 2 部 現代日常会話とジェンダー」では現代の日常会話を中心に観察する。「第 3 部 地域言語とジェンダー」には地域言語(方言)に関する論考を収め、「第 4 部 古典語とジェンダー」には中古語から近世語を研究対象とした論考を収める。具体的には以下の通り。

「はじめに」に続く第1部には以下の4章を収める。「第1章 〈女ことば〉文末詞の規範化——明治中期から昭和前期——（佐竹久仁子）」「第2章 ジェンダーに関わるステレオタイプの表現の文法論的・文体論的検討（森山卓郎）」「第3章 ことばが肉体を越えるとき（金水敏）」「第4章 寿岳章子 ジェンダーの視点による女のことば研究の先駆者（遠藤織枝）」。

第2部には以下の5章を収める。「第5章 埋め込まれる声——話法とジェンダー——（甲田直美）」「第6章 コーパス基盤型性差研究の方法論——男女大学生の会話に見る性差をめぐって——（石川慎一郎）」「第7章 終助詞に見られる男女差の実態とその経年変化——『昭和話し言葉コーパス』『日本語日常会話コーパス』を活用して——（小磯花絵）」「第8章 聞き手に対する敬語行動の男女差（荻野綱男）」「第9章 LINE の中のジェンダー——若者の言語意識と実態——（三宅和子）」。

第3部には以下の4章を収める。「第10章 方言使用地域における文末表現と自称詞の男女差の今——岡山市と鶴岡市の場合——（尾崎喜光）」「第11章 高知県幡多方言の呼称のバリエーションと性差——高年層話者の談話を資料として——（高木千恵）」「第12章 ジェンダーの視点からみた大阪若年層の言語実践——文法項目を対象に——（上林葵）」「第13章 親族語彙の変容から見る地域社会のジェンダー観とその再構築（日高水穂）」。

第4部には以下の3章を収める。「第14章 平安貴族の言葉遣いにおける傾向的性差——「な～そ」の用法の歴史社会語用論的解釈の試み——（森山由紀子）」「第15章 『今昔物語集』における「女」と「男」の非対称性（田中牧郎）」「第16章 近世後期洒落本から考えることばの性差——自立的機能語を中心に——（森勇太）」。

末尾に「編者・執筆者紹介」を付す。（竹村明日香）

（2025年10月22日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 404頁 定価5,500円 ISBN 978-4-8234-1291-2）

石山裕蔵著『動的視点からの日本漢字音史研究』

本書は、中世以降の日本漢字音の実態と変遷について様々な資料に基づきながら検証を行ったものである。特に、日本漢字音は経年変化の中で受動的に決められたものではなく、当時いくつか存した論理や力学により自覚的・無自覚的に選択されたものであることを主張する。中世以降の日本漢字音の様相を、成立背景をも含めて描き出す一書である。

構成は全3部16章からなる。「第1部 中世日本漢字音の種々相」「第2部 「漢語音」の視点から見た日本漢字音の変化」「第3部 漢字音の日本語化と学問的干渉」。以下、各部ごとに章を挙げる。

「凡例」「序章」に続く第1部では、中世漢音資料における日本漢字音の実態について論じる。「第1章 漢籍訓読資料における漢字音の実態（1）——『論語』の場合——」「第2章 漢籍訓読資料における漢字音の実態（2）——『莊子』の場合——」「第3章 漢籍訓読

資料における漢字音の実態 (3) ——『遊仙窟』の場合——」「第4章 日本漢文における漢字音の実態 (1) ——『本朝文粹』の場合——」「第5章 日本漢文における漢字音の実態 (2) ——『世俗諺文』の場合——」。

第2部では声調に焦点を当て、声調変化が生じやすい呉音の漢語について論じる。「第1章 呉音字音直読資料における「漢語音」をめぐる」「第2章 片仮名交じり文における漢語声調——親鸞自筆『三帖和讃』の場合——」「第3章 漢籍訓読資料における漢語声調——『本朝文粹』の場合——」「第4章 『四座講式』における漢語声調の変化」「第5章 『補忘記』の漢語アクセント」「第6章 漢語声調・アクセント史研究をめぐる諸問題」。

第3部では、日本漢字音に影響を与えた圧力の内実について検証する。「第1章 室町時代の『論語』古写本の清濁」「第2章 浄土三部経音義の漢字音」「第3章 法華経音義における t 入声字の表記——日本漢字音史資料としての側面から——」「第4章 字音仮名遣いの整備と現状——豪韻字の場合——」「第5章 日本漢字音における「一字複数音」の歴史」。

そして末尾に「参考文献一覧」「後書き」「索引」を付す。(竹村明日香)

(2025年10月25日発行 勉誠社刊 A5判縦組み 432頁 定価12,100円 ISBN 978-4-585-38007-8)

仲本康一郎著『環境を語る言葉——生態心理学から見た語彙意味論——』

人間のコミュニケーションは、特定の環境とその中で行われる活動に支えられることによって組織化される。本書は、こうした活動とともにある言語を「環境を語る言葉」と呼び、私たちが環境の中で何を知覚し何に注意を向けているのか、さらにそうした情報をもとに私たちは活動をどのように調整しているのかについて考察している。本書では生態心理学の実在論に基づき、言語を成り立たせているものとして人間の認知よりも私たちが生きる環境を重視し、構造化された環境とそこでの活動こそ認知と言語を支えていることを主張している。なお、本書は「シリーズ 認知と言語」第1期のシリーズとして刊行された。

本書の構成は以下のとおり。「[「シリーズ 認知と言語」刊行のことば]」「はじめに」に続き、「序章 本書の立場と目標」「第1章 生態心理学の意味研究」「第2章 言語発達と文化学習」「第3章 事物の操作と相互作用」「第4章 移動の空間と接近可能性」「第5章 資源と欲求の意味論」「第6章 事象の構造とアスペクト」「第7章 評価と活動の意味論」。末尾に「おわりに 認知から活動へ」を配し、あとがきと索引を付す。(川島拓馬)

(2025年10月25日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 272頁 定価4,620円 ISBN 978-4-89476-622-8)

本多啓著『日英語の可能表現の本質——アフォーダンスと原因帰属から見た英語中間構文と日本語無標識可能表現——』

本書は、英語の中間構文と日本語の無標識可能表現を対象に、認知意味論の立場から

考察するものである。中間構文に対して、明示的な可能表現を持たないにもかかわらず可能の意味を表すことから、可能表現という観点からアプローチすることで、従来の研究では得られなかった新しい知見を得ている。併せて、明示的な可能表現を持たない日本語の無標識可能表現についても、中間構文との対応関係も含めて考察が行われる。こうした考察にあたっては、生態心理学のアフォーダンス理論と、社会心理学において提示された「原因帰属」の概念を理論的な枠組みとして採用している。なお、本書は「シリーズ 認知と言語」第1期のシリーズとして刊行された。

本書の構成は以下のとおり。「[「シリーズ 認知と言語」刊行のことば]」「まえがき」に続き、「第1章 はじめに」「第2章 能力可能・状況可能の区別と英語の助動詞 can」「第3章 可能表現と原因帰属」「第4章 英語の中間構文の基本的な意味構造」「第5章 英語中間構文と動詞の種類——プロトタイプカテゴリーとしての英語中間構文再考(1)——」「第6章 英語中間構文と動作主——プロトタイプカテゴリーとしての英語中間構文再考(2)——」「第7章 日本語の無標識可能表現」「第8章 特殊仕様を表す英語中間構文」「第9章 英語における他動詞由来の主体移動表現について」「第10章 おわりに」。末尾に「あとがき」を付す。(川島拓馬)

(2025年10月25日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 370頁 定価5,060円 ISBN 978-4-89476-623-5)

小林賢次著、小林千草編、賢草日本語研究会監修『小林賢次著作集 第三巻——狂言台本の研究とことば(その一)——』

本書は、『小林賢次著作集』全6巻のうちの第3巻に当たる。故・小林賢次氏の著作のうち、狂言台本の資料的考察(第Ⅰ部)、狂言台本における語彙・語法の研究(第Ⅱ部)、そして狂言台本や他の中世期資料を用いた語史・語法史研究(第Ⅲ部)の論考を収める。和泉流、大蔵流、鷺流などの狂言台本を用いて、ゴザル・オリヤル等の待遇表現や助動詞、二段活用的一段化、疑問文、「真っ赤な嘘」などの慣用表現について論じている。

本書は全3部10章からなる。「凡例」「序章 狂言のことば——その特質と研究状況——」に続く「第Ⅰ部 狂言台本の資料性の考察」には、「第一章 言語資料としての天理本『狂言六義』」「第二章 言語資料としての和泉家古本『六義』」「第三章 『大蔵虎寛本』能狂言」における衍字・脱字の校訂について」を収める。「第Ⅱ部 狂言台本を対象とする語彙・語法の研究」には、「第四章 話す行為を表すことばの待遇的考察——大蔵虎明本を中心に——」「第五章 天理本『狂言六義』の用語」「第六章 版本狂言記の言語」「第七章 固定期狂言台本における「ゴザリマスル」」「第八章 大蔵虎光本狂言集の本文の異同について」を収める。「第Ⅲ部 狂言台本その他を資料とする語史・語法史研究」には、「[「ウゴク(動)」と「ハタラク(働)」——中世における意味変化を中心に——]」「第十章 慣用表現の成立と展開」を収める。「終章 まとめ」の後には、「引用・参考文献」「小林賢次自筆書き入れより(編者の解説を含む)」「所収論文の掲載書籍・雑誌一覧(第三巻)」「本書

所収の論文解説と未来への展望（その一）（小林正行）」「本書所収の論文解説と未来への展望（その二）（山田里奈）」「編者のことば（小林千草）」「賢草日本語研究会より御礼のことば」を掲載する。（竹村明日香）

（2025 年 10 月 29 日発行 武蔵野書院刊 A5 判縦組み 446 頁 定価 12,100 円 ISBN 978-4-8386-0812-6）

仁科明著『古代日本語述語体系論』

本書は、古代語のいわゆる「助動詞」の意味とその体系について論じたものである。議論にあたっては、伝統的な国文法、とりわけ山田文法の流れを汲みながら、その立場と方法による述語論の更新が目指されている。具体的には、述語形式に関する著者の考えを概説的に示した後、その見通しに沿って古代語における個々の述語形式について考察を行っている。

本書の構成は以下のとおり。冒頭の「本書の内容と構成——とてもみじかい導入部——」に続いて「第一部 上代日本語の述語形式（複語尾とその周辺）」を置く。「第二部 古代語の述語形式にかんする各論」は2章からなり、「第一章 a類複語尾にかかわる議論」には「第一節 「(ら)ゆ」「る」(上代)」「第二節 「り」「たり」」「第三節 中間的複語尾(「つ」「ぬ」などの位置づけ)」を収める。「第二章 b類複語尾とその周辺」には「第一節 連用形分出の複語尾——「き」「けり」と「けむ」「けらし」(上代)——」「第二節 未然形分出の複語尾——「ず」「む」「まし」「じ」とその周辺——」（この下位を「第一論文 「ず」「む」「まし」「じ」の認識・判断系用法」「第二論文 広義希望表現形式(「ず」「む」「まし」「じ」の位置づけ)」に分ける)「第三節 終止形分出の複語尾——「らし」と「らむ」と「べし」——」（この下位を「第一論文 「らし」」「第二論文 上代の「らむ」と「らし」」「第三論文 中古の「らむ」」「第四論文 「べし」」に分ける)「第四節 動詞基本形と「終止なり」」（この下位を「第一論文 動詞基本形」「第二論文 「終止なり」」に分ける)を収める。「第三部 形式と意味の諸相」には「第一章 喚体的名詞一語文(現代語)——文の意味の分化の論の前提として——」「第二章 非引用の「～すと……」」「第三章 「恒常」と「一般」」を収める。次いで「附録一 複語尾体系論攷(初期の見通し)」と「附録二 本書各部の初出情報・執筆経緯・修正点・補足コメントなど」を配し、末尾に「あとがき——ながいながいつけたりの話——」「詳細目次」「人名索引」を付す。(川島拓馬)

（2025 年 10 月 30 日発行 花鳥社刊 A5 判横組み 448 頁 定価 7,150 円 ISBN 978-4-86803-027-0）

山内昇・大名力著『コーパスと語用論研究』

本書は語用論研究におけるコーパス利用について論じたものだが、コーパス検索時の注意点に関する情報が重点的に扱われている。「コーパスデータは信用できる」という思い込みに警鐘を鳴らし、コーパスの利用に対し肯定的な立場から批判的に検討するものである。具体的には、語用論研究におけるコーパスデータの位置づけ、検索方法や分

類、数値化や解釈などの諸問題について、留意すべき点に細かく言及している。次いで、映画作品の字幕を収録した **The Movie Corpus** を取り上げて具体的な事例を基に注意点を挙げ、さらにコーパス研究における「失敗学」の提案を行っている。

本書の構成は以下のとおり。「はじめに」に続き、「第1章 コーパスと語用論（山内昇・大名力）」「第2章 研究対象，方法とコーパスデータ（大名力）」「第3章 数値化，信頼性，妥当性と解釈の問題（大名力）」「第4章 コーパス研究の事例の検証（大名力）」「第5章 語用論研究資料としての **The Movie Corpus** の可能性と注意点（1）——コーパスデータの性質——（山内昇）」「第6章 語用論研究資料としての **The Movie Corpus** の可能性と注意点（2）——検索インターフェイスの仕様と検索事例——（山内昇）」「第7章 コーパス研究失敗知識データベースの構築と公開に向けて（山内昇）」。（川島拓馬）

（2025年10月31日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 292頁 定価3,960円 ISBN 978-4-8234-1313-1）

陳力衛編著『近代啓蒙の黎明期——『同人社文学雑誌』の世界——』

『西国立志編』で知られる中村正直（字は敬宇，1832-1891年）は、漢文に造詣が深く、儒教經典に精通した人物でもあった。彼は、福沢諭吉の慶應義塾とも並び称された同人社を設立し、明治9（1876）年から同16（1883）年まで『同人社文学雑誌』を発行する。この雑誌では漢文と和文が両用され、歴史・伝記・学術・政治・宗教・哲学・詩歌などの広範な内容が掲載された。本書では、『同人社文学雑誌』が啓蒙思想や新漢語の伝播に大きく寄与していたこと、そして日中文化人の交流をも育んでいたことを伝える。

構成は、中村正直（中村敬宇）の思想や人物を扱う前半と、『同人社文学雑誌』における文体と言葉の問題を取り上げる後半に分かれる。具体的には以下の通り。

「序 中村敬宇と『同人社文学雑誌』（明治九—十六年）（陳力衛）」「近代知としての日本漢文と中国的受容（章清・陳力衛）」「中村敬宇の自然史志向性に関する一試論——『同人社文学雑誌』を中心に——（李梁）」「『同人社文学雑誌』と来日した中国の人々（陳捷）」「明治期来日中国民間文化人王治本について——その経歴をめぐって——（王宝平）」「同人社社員大野太衛とその『近史偶論』（陳力衛）」「井上哲次郎の漢文著述概観（陳力衛）」「もう一つの「言文一致」——中村敬宇・加藤弘之の講演・演説、論説文の文体についての試論——（李長波）」「『同人社文学雑誌』に見る国語国字問題——資料と考察——（木村義之）」「『同人社文学雑誌』の外国語のカタカナ表記から外来語へ（木村一）」「『同人社文学雑誌』総目録（李長波）」「執筆筆者一覧」。（竹村明日香）

（2025年11月10日発行 三省堂刊 A5判縦組み 384頁 定価4,180円 ISBN 978-4-385-36101-7）

板東美智子・松井理直・澁谷みどり・日高俊夫・折田奈甫編『語彙主義に基づく言語研究——基礎と応用研究—— 郡司隆男先生御退任記念論文集』

本書は、理論言語学研究者である郡司隆男氏の退任を記念して、同僚教員及び教え子

らによって編まれたものである。

本書は全2部21章からなる。「まえがき」に続く「第I部 特別記事」には、「第1章 物理・情報・言語——ある言語愛好家のレシピ——（郡司隆男・折田奈甫）」「第2章 Reflections on JPSG——38 Years Later——（Kazuhiko Fukushima）」を収める。

「第II部 研究論文」には以下19章を収める。「第3章 JPSGにおける音韻情報表現（松井理直）」「第4章 「指定文」の特性——リスト、リストのリスト——（西垣内泰介）」「第5章 経験主主語を選ぶ日本語動詞「飛ばす」をめぐる一考察（今泉志奈子）」「第6章 状態を表す「～をしている」の意味的構成性（日高俊夫）」「第7章 複合動詞「V一直す」と多機能の「の」（澁谷みどり）」「第8章 On the processing of null subjects in benefactive constructions in Japanese（Kentarō Nakatani）」「第9章 ネコ文（藏藤健雄）」「第10章 名詞句内の「ような」の法助動詞用法（板東美智子）」「第11章 “Non-Negative Negation” in Nagoya Dialect（Naomi Harada）」「第12章 洗濯動作「乾」に関わる語彙の日中対照研究（黄愛玲）」「第13章 叙述場面における「～てくれる」と「～てもらう」の使用条件（池谷知子）」「第14章 穏当な発話が悪意を持つとき（河本雅一）」「第15章 「Because X」構文の使用実態（加野まきみ）」「第16章 い抜き言葉「ている」と「てる」（南部智史）」「第17章 兵庫県朝来市生野町における2拍名詞アクセントの世代差（田附敏尚）」「第18章 マオリ語における英語起源の語について（内田充美）」「第19章 小中高英語教科書における法副詞の使用実態（高橋有香）」「第20章 Story Retellingの認知プロセス（横川博一）」「第21章 言語運用の基底となる文法の研究について（大谷朗）」。最後に「郡司隆男先生 略歴と業績」「あとがきに代えて 郡司隆男先生との思い出（上村和美）」「執筆者紹介」を付す。（竹村明日香）

（2025年11月25日発行 日本評論社刊 A5判横組み 274頁 定価4,730円 ISBN 978-4-535-79016-2）

小林隆・中西太郎・津田智史編『語用論的方言学の始動』

本書は「語用論的方言学」をテーマにした論文集である。歴史語用論や社会語用論など、近年では語用論の発展がめざましいが、本書は、日本語の地理的側面（つまり方言）における語用論的特徴を明らかにすることを目指したものである。

構成は、全6部29編である。「まえがき」に続く「第1部 言語行動の諸相」には、相手への働きかけ（要求・意志表示・申し出など）や挨拶行動（感謝・謝罪）に関する以下の論考を収める。「山梨県奈良田方言における行為要求表現——命令形の運用を中心に——（小西いずみ）」「意志表現・申し出表現に用いる形式の選好の地域差（松木礼子）」「働きかけ方の地域差——行為実現系の言語行動について——（小林隆）」「感謝の言語行動における謝罪表現の特徴——全国通信調査データから——（峪口有香子）」「西日本方言における挨拶行動の中の謝罪表現——近畿・中国・四国の方言を対象として——（岸江信介）」「他家訪問に対する応答表現の地域差（中西太郎）」。

「第2部 表現と話術」には、恐縮緩和や罵倒表現、ボケとツッコミなど、話術やレトリック的な表現に関わる以下の論考を収める。「依頼受託の「イーグレーナコッチャネー」における方言語用論的研究（松田美香）」「憤慨」場面における罵倒語を使った表現の地域差再考（田附敏尚）」「感動詞の全国調査」における「ちょっと」の使用場面と地理的傾向（佐藤亜実）」「大規模言語調査による語用論的方言学へのアプローチ——東北を中心に——（塩田雄大）」「関西の言語行動とその地域的拡大（尾崎喜光）」。

「第3部 発想法と語用論」では、アスペクトや接続詞・接続助詞、民俗語彙、オノマトペといった題材を取り上げ、本来、文法論・語彙論の観点から扱われる題材を語用論的な発想法から探ろうとした論考が収められている。「文法的発想からみる将然表現の地域差（津田智史）」「共時態データに見る接続表現の動態変化——接続詞と接続助詞の変化速度——（甲田直美）」「養蚕語彙を用いた比喻表現の談話機能——群馬県藤岡市方言を中心に——（新井小枝子）」「方言オノマトペの伝達機能の地域差（川崎めぐみ）」「正月行事ニネンマイリの命名と伝播——語誌と語用論——（沖裕子）」。

「第4部 日常の会話を探る」には、会話をもとにして語用論に取り組んだ論考を収める。あいづちやターンテイキング、配慮、共通語と方言の切り替え、幼児の方言習得などに関する諸論考である。「会話の進め方の地域性についての考察——大阪と東京の高年層男性の雑談を例に——（太田有紀）」「介護現場における語用論的方言使用（後藤典子）」「東北と近畿における配慮の対比的な地域的特徴についての考察（加順咲帆）」「大阪市生まれの幼児の「な・ね」類習得に関する語用論的考察（友定賢治）」。

「第5部 さまざまな媒体を探る」には、子守歌やLINEスタンプ、看板のメッセージや教材など、様々な媒体における用例を観察したものを収める。「就寝を促す言語的方略としてのおどし表現——東北地方の子守歌詞章と寝かしつけの言語行動を対象として——（椎名渉子）」「モバイルメディアに現れる関西方言——LINEチャットで方言を「話す」とは——（三宅和子）」「LINEスタンプから見た言語行動の地域差（齋藤すみれ・小林隆）」。「方言看板の語用論的分析（斎藤敬太、ダニエル・ロング）」「日本語教育の聴解教材に描かれた大阪方言話者に関する一考察——『聞いておぼえる関西（大阪）弁入門』の分析——（櫛引祐希子）」。

「第6部 歴史語用論との接点」には、歴史語用論と語用論的方言学の交渉に関わる諸論考を収める。接続表現や感動詞、敬語、そして時代・地域の言語的な発想法についても論じられる。「大坂・江戸洒落本に見る逆接確定の用法分布について（矢島正浩）」「近世後期洒落本に見る接続詞・感動詞の地域差——談話標識の歴史的研究のために——（森勇太）」「歌舞伎台本「五大力恋臈」における台詞冒頭の感動詞——上方本と江戸本の異同を中心に——（半沢幹一）」「近代文学作品の中の方言——大阪・京都・奈良の特徴——（安井寿枝）」。末尾に「執筆者紹介」を付す。（竹村明日香）

（2025年11月28日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 648頁 定価11,550円 ISBN 978-4-8234-1319-3）

奥田靖雄・言語学研究会編，工藤真由美解説『日本語文法・文論——複文研究——』

本書は、言語学研究会のリーダー的存在であった奥田靖雄の文論構想のもとに、1980年代後半に分析が進められた複文に関する論考を収録したものである。具体的には、広義因果関係を表す条件づけ的な従属複文を対象とした論を中心に、時間的な従属複文、「なかどめ」構造の文、並列複文を扱った論へと展開されていく。なお、本書に収録されている論文には一般に馴染みのない用語が使われており、これについては工藤真由美による解説の中で説明が加えられている。解説においては、奥田靖雄の文論全体の中に複文論を位置づけて説明を行っている。

本書は全3部14章からなる。「まえがき」「解説（工藤真由美）」に続き、「第Ⅰ部 条件づけ的な従属複文」には「第1章 条件づけを表現するつきそい・あわせ文（一）——その1・まえがき——」「第2章 条件づけを表現するつきそい・あわせ文（二）——その2・原因的なつきそい・あわせ文——」「第3章 条件づけを表現するつきそい・あわせ文（三）——その3・条件的なつきそい・あわせ文——」「第4章 条件づけを表現するつきそい・あわせ文（四）——その4・うめ的なつきそい・あわせ文——」「第5章 条件づけを表現するつきそい・あわせ文——その体系性をめぐって——」を収める。「第Ⅱ部 時間的な従属複文」には「第6章 時間・状況をあらわすつきそい・あわせ文（1）——つきそい文が「してから」のかたちをとるばあい——」「第7章 時間・状況をあらわすつきそい・あわせ文（2）——つきそい文が「したあと」のかたちをとるばあい——」「第8章 時間・状況をあらわすつきそい・あわせ文（3）——つきそい文が「するまで」のかたちをとるばあい——」「第9章 時間・状況をあらわすつきそい・あわせ文（4）——つきそい文が「するまえ」のかたちをとるばあい——」「第10章 接続詞「とき」によってむすばれる、時間的なつきそい・あわせ文」「第11章 同時性をあらわす時間的なつきそい・あわせ文——「あいだ」と「うち」——」を収める。「第Ⅲ部 「なかどめ」構造の文」には「第12章 なかどめ——動詞の第二なかどめのばあい——」「第13章 なかどめ——動詞の第一なかどめのばあい——」「第14章 なかどめ——動詞の第一なかどめと第二なかどめとの共存のばあい——」を収める。次いで「補遺 ならべ・あわせ文——接続詞「が」によって表現される並列的な関係——」を配し、末尾にあとがきと索引を付す。（川島拓馬）

（2025年12月1日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 474頁 定価6,600円 ISBN 978-4-8234-1309-4）

熊谷学而著『「かわいい」言語学——音とイメージから解明するネーミングのしくみ——』

本書は、「かわいい」と感じるものについて音象徴の観点から探究した書である。赤ちゃん用オムツや、アイドルのニックネーム、ゆるキャラの名前といった卑近な例を取り上げて、「かわいい」と感じる理由を言語学的に解説する。

本書は全9章からなる。「プロローグ」「第1章 「かわいい」の研究」「第2章 「かわいい」言語学とは何か？」「第3章 音声学の基本的知識」「第4章 「赤ちゃん」のイメージを持つ音」「第5章 「かわいい」子音・「かわいい」語形」「第6章 アイドル

の「かわいい」ニックネーム」「第7章 「ゆるキャラ」の名前は「かわいい」のか?」「第8章 名付けの世界」「第9章 外国語にも「かわいい」子音はあるのか?」。末尾に「エピローグ」「補遺1」「補遺2」「引用文献」「さくいん」を付す。(竹村明日香)

(2025年12月1日発行 大修館書店刊 四六判横組み 224頁 定価2,640円 ISBN 978-4-469-21403-1)

佐々木冠編『逆使役関連形態法の広がり』

自他動詞対の類型において、他動詞よりも自動詞の方が形態的に有標な対を逆使役型と呼ぶ。本書は、逆使役構文の述部を構成するのに用いられる形態素の統語論・意味論上の用法の広がりとは形式的な変異に関する論考を集めた論文集である。逆使役型の自動詞を派生させる生産的な形態統語論的手段は様々な言語変種において見られ、日本語の諸方言を含めて通言語的な観点から論じられている。

本書の構成は以下のとおり。「前書き（佐々木冠）」に続き、通言語的観点から逆使役関連形態法の広がり进行分析した第1部には「日本語諸変種における対象物の結果状態の表現——逆使役構文、テアル、非情の受身——（白岩広行）」「北海道方言「ラサル」の非対格使役分析（大野公裕）」「青森県津軽方言の接尾辞「サル」の諸用法とその起源——今別町方言を例に——（大槻知世）」「フィンランド語における再帰動詞による逆使役化について（佐久間淳一）」「リトアニア語の自動詞から作られる有再帰接辞自動詞の意味領域（櫻井映子／Giedrė JUNČYTĖ（ギエドレ・ユンチャーテ）」を収める。逆使役関連形態法の形式上の多様性を扱った第2部には「北海道方言におけるサ抜き現象（佐々木冠）」「北海道方言自発述語における連結子音のゆれ（佐々木冠）」を収める。(川島拓馬)

(2025年12月10日発行 くろしお出版刊 A5判横組み 200頁 定価3,850円 ISBN 978-4-8011-1024-3)

中村桃子著『翻訳から広がる日本語——女ことば・男ことば・疑似方言——』

映画『エイリアン』の日本語版で主人公リプリーは「やっつけたわ 化け物!」と叫ぶ。英語のひどい罵り言葉も、日本語では控えめで丁寧な「女ことば」に翻訳されるのである。本書ではこうした翻訳における「○○ことば」(特に「女ことば」「男ことば」「疑似方言(疑似東北弁)」)を取り上げ、新たな発見の提示や問題提起を行う。「翻訳される言語社会」と「翻訳する日本語社会」を観察することで、言語イデオロギーやステレオタイプの内実などを明らかにしようとしている。

本書は全5部10章からなる。「はじめに——翻訳ことばの世界を楽しもう!——」に続く「第1部 翻訳の中の「女ことば」——近づける翻訳——」には、「第1章 外国人女性は「女ことば」で話す」「第2章 なぜ翻訳では女ことばが使われるのか——言語イデオロギー——」を収める。「第2部 翻訳の中の「男ことば」——区別する翻訳——」には、「第3章 西洋の若者は「翻訳版男ことば」で話す」「第4章 白人は使えない「男ことば」——言語ナショナリズム——」を収める。「第3部 翻訳の中の「方言」——優劣を対応させる翻訳——」には、「第

5章 黒人が話す「疑似方言」「第6章 優劣を対応させる翻訳——「○○ことば」から翻訳を考える意義——」を収める。「第Ⅳ部 翻訳から変わる日本語」には、「第7章 攻撃する女ことば——一九七〇年代「翻訳される言語社会」の変化——」「第8章 親疎で使い分ける女ことばと標準語——二〇〇〇年代「翻訳する言語社会」の変化——」を収める。「第Ⅴ部 翻訳がつくるステレオタイプ——割り振る翻訳——」には、「第9章 丁寧なアジア女性とカジュアルな欧米女性——人種との交差性——」「第10章 気さくな欧米の高齢男性——年齢との交差性——」を収める。末尾に「参考文献」と「あとがき」を付す。(竹村明日香)

(2025年12月10日発行 白澤社刊 四六判縦組み 232頁 定価2,750円 ISBN 978-4-7684-8008-3)

新屋映子監修、山口恵子・岩佐詩子編著『感謝です』って正しい日本語ですか？』

本書は、日本語教師として現場に立つ教員らの「これはどう教えたらいのか」「これは正しい言い方なのか」と迷った日本語の例を取り上げたものである。幅広い層に読んでもらえるよう、論文ではなく読み物として書かれている。豊富な用例と平易な文章で、日本語教師だけでなく日本語学習者にも役立つよう工夫が凝らされている。

本書は3つのPartからなる。Part Iでは語彙・表現に関わるもの、Part IIでは文型・文法に関わるもの、Part IIIでは日本語の変化に関するものを取り上げる。

「Part I なんかにへん——語彙・表現にかかわるもの——」には、「1) 人たちが泳いでいました」「2) 書きたての作文」「3) 宝くじに当たって、あきれてしまいました」を収める。

「Part II なんかにへん——文型・文法にかかわるもの——」には、「4) この雲行きだと雪が降りかねない」「5) 先生は日光に行ったことがありましたか」「6) 洗濯物〔が／を〕干しっぱなしだ」「7) 感動したことに、『ライオンキング』を見た」「8) 新しい携帯は、値段は〔安い／高い〕ものの、通信速度は速い」「9) 最近のゲームは子どもはおろか、大人も十分楽しめる」「10) 友だちに会って、うれしい」「11) 彼と北海道に行った〔の／こと〕を思い出した」「12) 午後5時〔に／、〕終業のチャイムが鳴りました」「13) 聞いた？——聞いて (い) ない／聞かなかった——」を収める。

「Part III なんかにへん——身近な日本語の変化——」には、「14) 感謝です」「15) 授業が終わったっぱいよ」「16) おいしみが深い」「17) 感謝しかない」「18) 立ち読まないでください！」を収める。

著者には、相川弓映、大輪香菊、東條和子、飛田美穂、仲瀬志保美、築晶子も名を連ねる。(竹村明日香)

(2025年12月10日発行 桜美林大学出版会刊 A5判横組み 168頁 定価2,200円 ISBN 978-4-8460-2531-1)

近藤泰弘・澤田淳編『日本語文法研究の射程——テキスト・文体・文学との交差——』

本書は、「文法とテキスト・文体・文学との交差」をキーワードに掲げ、日本語文法

研究の新たな展開を探る論文集である。従来研究されてきた文法の諸相を、テキスト的・談話的機能の観点から体系的に捉え直し、これまでの記述文法研究を補完する「もう一つの日本語文法」を描くことが意図されている。本書は、文法の側からテキスト・文体・文学にアプローチする点に特色があり、日本語文法研究の議論の枠を広げるとともに、テキスト論、文体論、物語論、文学研究に対して新しい知見を示すことも視野に入れている。なお本書は、2024年9月に開催された青山学院大学日本文学会主催のシンポジウムを基に編まれたものである。

本書は全4部からなる。「まえがき（近藤泰弘・澤田淳）」に続き、「第Ⅰ部 日本語の文体・ジャンルの特徴と類型——文法的文体論のアプローチ——」には「日本語文の分類——文ベクトルの分析から——（近藤泰弘）」「探索的因子分析による日本語文体の抽出（中俣尚己）」「文法から見たテキストジャンルの文体論的整理（森山卓郎）」を収める。「第Ⅱ部 文法と文体・ジャンルの相互作用——豊かな文法記述を目指して——」には「構文とジャンル特性（天野みどり）」「『のだ』文の構造と説明的意味の実現（大木一夫）」「『勧め』を表すモダリティ表現の普通体と丁寧体をめぐって——『しよう』と『しましょう』、『しないか?』と『しませんか?』——（前田直子）」「X（Twitter）に現れる『見出し的』無助詞提題文——ジャンルに枠づけられる文法——（大江元貴）」を収める。「第Ⅲ部 文法史と文体・ジャンル・資料——文法変化の（舞台）を捉える——」には「動作を表さない『スル』——歴史的観点から——（青木博史）」「日本語における『理由の説明』の歴史（北崎勇帆）」「書き言葉テキストにおけるラレ構文の展開——主催から非情主語受身へ——（志波彩子）」「変体漢文における格標示の方法と実態（田中草大）」を収める。「第Ⅳ部 文法と文学テキスト——視点・翻訳・話体との関わりから——」には「敬語から見る日本語の物語の文体とその歴史——敬語の加除と視点の切り替えの相関現象に注目して——（澤田淳）」「源氏物語の英訳における『ム』の訳出——ウェイリー訳とサイデンスティッカー訳を例に——（林淳子）」「話体研究と翻訳、および文法について——村上春樹小説作品を出発点として——（金水敏）」を収める。（川島拓馬）

（2025年12月15日発行 開拓社刊 A5判横組み 452頁 定価6,820円 ISBN 978-4-7589-2425-2）

西村義樹監修，山泉実・窪田悠介編著『言語学を科学哲学する』

本書は理論言語学研究に関するメタ的な考察を行うことを意図したものであり、生成文法と認知言語学、およびそれらの関連研究をカバーするように編まれている。各章においては、言語研究の科学研究としての位置づけや諸問題について論じられる。本書では、こうした論考を通じて、言語研究において既に定着した方法論や慣習が改めて問い直されることを目指している。

本書は全3部8章からなる。冒頭に「本書成立の経緯と趣旨：今なぜ、言語学を科学哲学するのか？（山泉実・窪田悠介）」を置き、「Ⅰ 総論：言語学を科学哲学するために」には「第1章 【増補改訂版】言語学の理論的研究を阻害する諸バイアス（山泉実）」「第

2 章 言語研究における理論の構築と反証：心理学における再現性問題から（佐治伸郎）」を収める。「Ⅱ 各論：意味と形式に関する探求のありかたについて」には「第3章 非（自然）科学としての認知言語学（田中太一）」「第4章 閉鎖系としての言語（中村一創）」「第5章 形式意味論研究における理論構築について（窪田悠介）」「第6章 実験意味論・語用論（和泉悠）」を収める。「Ⅲ 展望：外に開かれた言語研究に向けて」には「第7章 容認性判断を用いた言語研究はいつ悪くなるのか（太田陽）」「第8章 GrammarXiv：言語学の論点整理と点別評価を目指して（成田広樹）」を収める。なお各章には読書案内が設けられ、読者への更なる学びが促されている。末尾に索引を付す。（川島拓馬）

（2025 年 12 月 20 日発行 大修館書店刊 A5 判横組み 296 頁 定価 3,300 円 ISBN 978-4-469-21402-4）

小林賢次著，小林千草編，賢草日本語研究会監修『小林賢次著作集 第四巻——狂言台本の研究とことば（その二）——』

本書は、『小林賢次著作集』全6巻のうちの第4巻に当たる。流派固定以前のものである天正狂言本から、大蔵流、和泉流、鷺流の狂言台本、そして版本狂言記までも調査対象として、本文の比較や、未詳語、類義語などの検討を行っている。第三巻に引き続き、「シャル」「サシャル」「申サルル」などの待遇表現も取り上げている。

本書は全2部12章からなる。「凡例」「序章 狂言台本の研究とその刊行状況・本書の底本」に続く「第Ⅰ部 言語資料としての狂言台本」には、「第一章 大蔵虎明本における狂言詞章の伝承と改訂——本文注記の分析から——」「第二章 天理本『狂言六義』の用語」「第三章 鷺流享保教本の用語」「第四章 和泉流雲形本『狂言六議』の本文の性格について——筆録時期と言語事象——」「第五章 和泉流雲形本と古典文庫本の本文比較」「第六章 南大路家旧蔵和泉流狂言台本とその翻刻本文について——言語資料としての『狂言集成』と『狂言三百番集』——」「第七章 和泉流三百番集本におけるシャル・サシャル敬語」「第八章 言語資料としての天理図書館蔵『狂言_{大外}』『狂言_新』」「第九章 天理図書館蔵『狂言_{大外}』におけるシャル・サシャル敬語」を収める。「第Ⅱ部 狂言台本に関連する言語事象」には、「第十章 「重宝」と「調法」——狂言台本における使用状況とその語史——」「第十一章 イソガシ・セハシ・アワタタシとその類語——中世・近世における〈多忙〉〈性急〉を表す語の展開——」「第十二章 狂言台本における謙譲語法——「申サルル」とその周辺——」を収める。末尾に「引用・参考文献」「所収論文の掲載書籍・雑誌一覧（第四巻）」「本書所収の論文解説と未来への展望（その一）（小林正行）」「本書所収の論文解説と未来への展望（その二）（苅宿紀子）」「賢草日本語研究会より御礼のことば」を付す。（竹村明日香）

（2025 年 12 月 23 日発行 武蔵野書院刊 A5 判縦組み 310 頁 定価 11,000 円 ISBN 978-4-8386-0813-3）

小木曾智信・山崎誠監修，石黒圭・烏日哲編『学習者コーパスの設計と構築』

本書は、『日本語学習者の縦断作文コーパス』(W-CoLeJa)という学習者コーパスについて、その開発の背景、設計の概要、活用の方法等を紹介するものである。本書は、W-CoLeJa を用いて研究を行いたいと考える研究者、学習者コーパス全般に対して理解を深めたい初心者、学習者コーパスを教育現場に応用したい言語教育者、自作の学習者コーパスを新たに構築したいコーパス開発者といった幅広い層に向けて、必要な知識や技術、さらにその背後にある考え方や心構えを示している。なお本書は、国立国語研究所によるプロジェクト「開かれた言語資源による日本語の実証的・応用的研究」の成果をまとめた、「シリーズ言語資源学」の一環として刊行された。

本書の構成は以下のとおり。「[シリーズ言語資源学]」の刊行にあたって(小木曾智信・山崎誠)「はじめに(石黒圭)」に続き、「第1章 学習者コーパスの意義と役割(迫田久美子)」「第2章 日本語学習者コーパス開発の歴史(石黒圭・呉楚琦)」「第3章 学習者コーパスの設計(石黒圭)」「第4章 調査協力者に調査を依頼する(烏日哲)」「第5章 入力インターフェースの開発——EssayLoggerとMoodle——(井上雄太)」「第6章 母語対訳データの意義と活用法(呉丹)」「第7章 日本語能力測定試験の作成とその妥当性の検証——「かんたん日本語テスト」——(市江愛・吉田暁)」「第8章 学習者の背景情報の収集法(田佳月)」「第9章 学習者の学習環境と学習リソースを把握する(田昊)」「第10章 学習者作文における形態素解析の課題と対応(李琦・朱雅蘭・工藤隆弘・横野光)」「第11章 日本語教師の誤用訂正はどこまで一致するのか(中村有里・江澤実紀・高橋香菜・Lai Thanh Hoa・石黒圭)」「第12章 生成AIはどのように学習者作文の誤用を訂正するのか——誤用分析のアノテーション付与のための一考察——(加藤敬介)」「第13章 印象評価情報の付与(本多由美子・井伊菜穂子・石黒圭)」「第14章 W-CoLeJa 活用環境の構築——全文検索システム『ひまわり』を用いて——(山口昌也)」「第15章 学習者コーパスの公開と公開後の運用(須賀和香子)」。末尾に「おわりに(石黒圭)」と索引を付す。(川島拓馬)

(2025年12月27日発行 研究社刊 A5判横組み 270頁 定価3,300円 ISBN 978-4-327-26101-6)

渋谷良方著『認知社会言語学への招待——認知言語学の新しいアプローチ——』

認知社会言語学(Cognitive Sociolinguistics)とは、認知言語学と社会言語学の知見を融合し、言語変異を認知的要因と社会的要因の両面から統合的に分析しようとするものである。本書はその実践例と理論的可能性を明らかにすることを目的の一つとする。また、日本初の認知社会言語学の概説書としての役割を果たすことを目指し、多様な研究成果を紹介する。

本書は全3部8章からなる。「まえがき」「第1章 認知言語学の社会的転回と言語変異研究」に続く「Ⅰ 語彙とその意味の変異性」には、「第2章 類義語を巡る語彙変異研究」「第3章 多義性、メタファー、借用を巡る語彙研究」を収める。「Ⅱ 文法の

変異性」には、「第4章 コロストラクション分析に基づく文法変異研究」「第5章 統計的モデリングに基づく文法変異研究」を収める。「Ⅲ 言語態度とアイデンティティから見た言語変異研究」には、「第6章 レクトの習得と識別と評価」「第7章 アイデンティティと変異の社会的意味」「第8章 認知言語学の社会的転回と言語理論構築への道筋」を収める。末尾に「参考文献」と「索引」を付す。(竹村明日香)

(2026年1月20日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 340頁 定価4,400円 ISBN 978-4-8234-1306-3)

小木曾智信・山崎誠監修，小磯花絵編『日常会話コーパスの設計・構築・利活用』

本書は、『日本語日常会話コーパス』(CEJC)の構築経験に基づき，会話コーパスの構築と活用に必要な基礎知識をわかりやすく解説するものである。CEJCの特徴を踏まえてその設計・構築のプロセスを体系にまとめた前半(第1～第4章)と，CEJCを利用するための実践的方法を紹介した後半(第5～第8章)からなる。なお本書は，国立国語研究所によるプロジェクト「開かれた言語資源による日本語の実証的・応用的研究」の成果をまとめた，「シリーズ言語資源学」の一環として刊行された。

本書の構成は以下のとおり。「『シリーズ言語資源学』の刊行にあたって(小木曾智信・山崎誠)」「はじめに(小磯花絵)」に続き，「第1章 会話コーパスの設計と構築(小磯花絵)」「第2章 会話の収録・音声動画データ(臼田泰如)」「第3章 会話の転記(臼田泰如)」「第4章 談話行為情報(居關友里子)」「第5章 「中納言」を活用した分析(小磯花絵)」「第6章 ELANを活用した分析(川端良子)」「第7章 Praatを活用した分析(西川賢哉)」「第8章 リレーショナルデータベースを活用した分析(川端良子・小磯花絵)」。なお多くの章に，さらなる理解を深めるためのコラムが設けられている。末尾に索引を付す。(川島拓馬)

(2026年1月30日発行 研究社刊 A5判横組み 252頁 定価3,300円 ISBN 978-4-327-26102-3)